

ぬいはすぐ終わってしまった。

また毎日毎日入居する団地へダンボールを集めに行くことになった。学校備品の充実のための資金づくりである。毎日毎日ゴミ置き場に捨ててある大きなダンボールをたたんでまとめ、廃品回収業者に売った。めじろ団地、ちどり団地と走り回り、たくさんのダンボールを処分し、各教室に時計をとりつけることができたのである。

このお母さんたちの情熱は一体何なのか。この母たちの情熱こそ、この女性たちのパワーこそ、港南台を支え発展させ、住みよい街に仕立てていった力なのである。この母の、女のパワーが、港南台の根底の力だと思ふ。そのパワーが満ちていた第一小は、新生港南台の核であった。この力をけっして忘れては、また、見のがしてはいけない。

自治会、子供会は街の基盤

港南台の造成は一斉であったが、団地や家々は一群ずつ徐々に増えていった。そして、そのかたまりごと

に、きっかけは色々だったが自分たちの必要から自治会が誕生していった。それと同時に、子供を持つ親たちが子供のふるさと作りを根底に、子供会育成に力をそそぎ、親たち、子供たちの仲間作りが始まった。

私は思う。好きな者同士の集団は、それなりに自由なよさはあるだろう。しかし、仲たがいや意見の相違があればかんたんにこわれてしまう。それはそれでもよい。しかし、地について住む者たちにとって、隣り近所との一連のつながりは不可欠のものではなからうか。住民同士が仲よく、地域を大切に、人を大切にし、住みよい街を、努力して手をつなぎ作り上げてこそ、好きな人たち、目的を同じくする人たちの和が生まれてくるのではなからうか。その基盤は、小さくは自治会組織であり、大きくはオール港南台の安定活動だと思ふ。

新生のパワーに満ちていた第一小の開校から六年が経って昭和五十五年、港南台連合自治会が発足し、それより一年前母親たちの力で子供会

も連絡会ができ、親たちのふるさと作りは着々と進行していったのである。

女性パワーの源泉

港南台は四十九年頃からの一斉入居なので住民の年齢層は同じである。入居の頃は、夫は働きざかりで家庭や学校の事に気をつかうゆとりがなく、妻にまかされていた人が多かった。また、この年代は中学・高校を戦後の民主主義教育、男女同権の中で育てている。従ってみんな力で合わせて物事を進めてゆく事に慣れており、古い世代が居ないので、義理や体面に気をつかう必要がなく、さらに男性に気がねすることなく女性がのびのびと自分たちの力を発揮して活動できたこと、そしてこれからも活動できる条件が揃っていること——これが港南台の大きな

特徴だと思ふ。母親たちは子供たちのために、女性たちは自分たちのために活動ができ、そして今なお活動しつづけているのである。

「まち1986」に紹介されたグループも女性の活動グループばかりである。しかし、最近では地域全体の年齢があがり、活動に男性の姿をみるようになってきたように思う。これからは男性とのかかわりも考えて楽しい会を作り、港南台の発展に寄与したいと思ふ。

△港南台連合自治会婦人部長、港南台社会福祉協議会副会長、港南台民生委員協議会婦人民生委員代表、港南台少年サッカークラブ顧問、前・港南台連合自治会副会長、前・港南台青少年指導員協議会副会長、元・港南台子供会連絡会会長、元・港南台第一小学校世話人会副会長▽

「文化」で自治会の活性化を

池下高志

港南台に移り住んで八年、この間の六年間は会社勤めで、港南台とい

う地域社会には、ほとんど私は関心がなかった。せいぜい、近くの店に

買い物に出かけるか子供の運動会を見に行くくらいだった。自治会はおろか、地域内のサークルやクラブにも全く無関心で、「遊び」ももっぱら会社中心であった。

ところが、二年ほど前に会社を退職し、港南台・洋光台地域を中心にしたタウン紙を発行することになった。ハタと困ってしまった。街の出来ごとを取材するにも、サークルや人物を紹介する企画を立てても、どこに行けばよいのか、地域内での入とのつながりが全くなかったのだ。恥ずかしながら、連合自治会なるものがあることさえ知らなかった。

おそらく、当時の私のような「会社人間」が、この地域でも多数を占めていると思う。この人たちは、自治会、町内会の構成員でもある。

さて、実際に地域内を歩き回ってみると、つかみきれないほどの様々なサークルやクラブ、人々の集団があった。その多くが、自主的な活動を行っているボランティア・アンソニエーション(都市科学研究室編「まち1986」の序論での越智昇横浜市

大教授による定義)であった。ユニークな生き方をしている人、特別な才能を持っている人、地域活動に熱心な人など、すばらしい人々がこの地域に住んでいることも発見した。

港南台はまた、大型店舗や専門店の進出も激しく、マンションや住宅の建設もいまだに続いている。周辺には高校が三校、短大もあり学園都市でもある。港南台駅の乗降客数は、根岸線十駅の中で関内駅に次いで二位になったという。港南台はまた、住宅地としても商業分野でも発展途上にあるのだ。

この港南台の現在の姿を航空写真風に撮ったらどう写るだろうか？私のカメラには多分、無数の小さな文化があちこちに芽生え、しほんだり風になびいたりしている自治会の旗が立ち、駅にはサラリーマンの流れが続き、区役所まで行く人たちがバス停でイライラしながら時計を見つめ、大中小の店舗が立ち並び、ダンブや大型トラックが通れる幹線道路が住宅地を二分するように走り、街の中心部には大きな空地が三カ所、

広々とした空間を作り、それらが雑然とバラバラなモザイク模様となつて写るだろう。

港南台とはそんな街である。外部から侵入したエコノミックアニマルとひたすら自分(たち)の殻に閉じ込めろうとする人々が混在した街である。まさに「発展途上都市」であり、矛盾と可能性を密めたタウンである。

このタウンを良くするかどうかは、住民であり自治会・町内会であることはいうまでもない。その自治会・町内会はどうなっているか。地域に目を向け始めて二年足らずの私には正確な所は分らないが、めじろ団地など一部を除いては意欲的に活動しているとは思えない。あるいは今は、着々とその準備を始めているのかも知れないし、地域活動の活性化はこれから始まるのかも知れない。

しかし現実には、私が居住する南自治会のように、活動したい人を選出する選挙制度もなく、その年の当番のクジ引きで役員が決まる自治会

もあるのだ。

それぞれの分野でバラバラに発展している港南台を、より住み良い街にするには、単位自治会の活性化と、連合自治会の役割の再認識が必要ではないだろうか。残念ながら、多くの住民が連合自治会への関心や期待は持っていないように見える。かつての私のように、その存在さえ知らない人もいるはずだ。

自治会活動を活性化するには、運動の視点を変え、港南台の街づくりビジョンと明確な目標をかかげ、優秀な人材を確保することだと思ふ。そのカギは、「文化」にあると私は思える。先に述べた「会社人間」の目を地域に向けさせ、人材として活用するには、「会社文化」に勝る地域の文化を生み出せばよい。自主的に、しかしバラバラに芽生えている文化サークルには、自主性を最大限に保証しつつ援助し、連帯の輪を作ればよい。

サラリーマンの要求も、主婦が求めるものも時代と共に変化し、今は、多くの人たちが精神的な充実、

健康や知的喜びを欲求している。この要求にポイントを置いた活動が今の自治会には求められており、こうした活動が他の運動の発展にもつながるのではないか。コミュニケーションがない所には運動はない。今の港南台では、「文化」がコミュニケーションの潤滑油だと思う。

幸いに「二一街区の有効利用」を当面の活動目標にした「港南台文化会議」が発足した。この運動が、

「まち1986」を読んで——木下好夫

港南台地区に係る報告を読んで、公団による地区の建設が始まってまだ十数年という、若い港南台の住みよい街づくりにかける地域団体リーダーの心意気を再認識することができた。これはまた、同地区に住む私にとって常々感じていたことでもある。

自治会・町内会の活動状況が一覧で示されているが、既に成熟し、伝統のある地区と比較して、港南台地区は、会報の発行、事業の実施状況

より多くの地域住民が参加できる運動として発展し、同地に建設される「文化施設」が、港南台地区の総合的な発展をもたらすことを期待したい。

「タウンニュース」紙も、微力ながら港南台の発展のために寄与できればと思っている。

△「タウンニュース」・港洋新聞社代表▽

とも断然多い。今自分たちの住むこの地区を、人間性を回復するための生活拠点として捕えることのできるよう助長し、また、この地区で生まれ育った子供にとって、港南台こそふるさとであるという意識を形成するための努力が、各種事業の実施状況からうかがうことができる。

自治会主催の各種行事が紹介されているが、私の住む団地で一番人気の高いものは、団地まつり（夏まつり）であろうか。まつりには、ここ

数年本格的なおと神輿と、子供神輿が団地内を練り歩く。そして、神輿が団地を一周すると、次は小学校

低学年以下の子供を対象とした、人気がアニメを描いた山車の登場である。子供たちは、山車の前後に何百人もが群がり、ロープを引いて、やはり団地内を一周する。出発点まで戻ってくると、自治会のおばさんたちから、アイスクリームやスイカがもらえるのである。今年六歳になる我が娘も、アイスクリームが気に入ったのか、二歳の頃から毎年参加している。

また、個人のプライベートがしっかり守られ、ともすれば連帯意識も希薄になりがちな集合住宅において、住民相互の交流と、手短な自然とのふれあいの場を提供しようという趣旨で、報告書には紹介されていないが、管理組合の主催で手抜き除草の日が設定されている。年三〜四回、日曜日の午前中、団地の芝生へ出て雑草を抜くのである。参加者は、草むしりをしながらおしゃべりをしたり、子供たちは、ミミズやコ

オロギに驚いたり、それぞれが結構エンジョイしている。

報告の中でも述べられていたが、自治会事務を補助員で対応させていることと同様に、管理組合の事務もまた、委託されている。一方、業者委託も可能であろう草むしりについては、サラリーマンにとって大切な日曜の半日を共同作業で汗を流すことが選択されている。そこには、かつての村社会のように、個人の自由を犠牲にした上で成立っていたコミュニティは否定するが、人間性を尊重した連帯意識・公共意識については、積極的に育んでいこうという共通の認識があるように思われる。このような行事や共同作業に参加していくなかで蓄積された多様な事柄が、子供たちにふるさと意識を芽生えさせることとなり、また、地域コミュニティの創造、連帯意識の醸成へ大きな役割を果たすこととなるのであろう。

昭和六十一年七月十八日、十九日、ちようど団地の夏まつりが開催されると目を同じくして、私の勤務する